

新型 STREAM のデザイン

Styling Design of New STREAM

内 野 英 明*
Hideaki UCHINO

田 中 幸 一*
Koichi TANAKA

要 旨

新型 STREAM は、人とクルマのすべての接点で一体感が味わえ、積極的に使いたくなるクルマというコンセプトである Motion Designing という発想で開発した。

その中で、STREAM のデザインは、高性能なスポーツクーペを思わせる躍動感あふれるデザインを目指し、エクステリアデザインでは、“CROUCHING COUPE FORM”とともに、イメージモチーフを“SILVER WOLF”と定めた動物的な精悍さとシャープさをテーマに開発し、それを表現できるフォルムを実現させた。

インテリアデザインでは、“Emotional Sports Cockpit”と、“Modern Comfort”を融合した「スポーツモダンインテリア」をその開発テーマとして、先進コクピットと同時に各席の上質で快適な空間づくりとしての居住空間を実現することができた。

ABSTRACT

The concept of Motion Designing was used in the development of the new model STREAM to produce a vehicle that offers a sense of integration at every point of contact between vehicle and human user and that urges the owner to drive it.

The aim of the design of the STREAM was to reproduce the dynamism of a high-performance sports coupe. A “Crouching Coupe Form” was the basis of the exterior design. In addition to this, the image of a “Silver Wolf” was adopted as a design motif, and the form was designed to express the sense of aggressiveness and sharpness suggested by that image.

The design theme for the interior was “Modern Sporty Interior,” representing a fusion between “Emotional Sports Cockpit” and “Modern Comfort.” This has resulted in an advanced cockpit with comfortable, high-quality seats producing the feel of a cozy living space.

1. はじめに

国内市場にミニバンというカテゴリーが定着し始めてから、10年以上の年月が経過したが、初代 STREAM は2000年10月26日にデビューし、その新しいコンセプトがたくさんのお客様に受け入れられたと認識している。

それから約6年の年月が経った現在、市場・お客様・車自身の価値も多種多様化してきた。そのような背景であるからこそ Honda は Honda らしく新しい価値のクルマを提案しようという意思を込め2代目となる新型 STREAM を開発した。

新型 STREAM は、人とクルマのすべての接点で一体感が味わえ、積極的に使いたくなるクルマというコンセプトである Motion Designing という発想で開発がスタートした。その開発にあたり、デザイン領域においては、これから

の新しいカテゴリースタンダードとなり得ること、所有する事に誇りを感じることができ、またストレスをまったく感じないクルマとは何かを念頭においた。ミニバン所有に抵抗を感じず、クルマを所有するなら自らが愛着をもてる、例えばずっと眺めていたい、洗車が楽しい、運転して楽しいプライドを持てる新しい価値を持ったスポーティなクルマを創りたい、すなわち“Fun To Have STREAM”という思いがデザイン開発の原動力となった。

新型 STREAM の開発コンセプトの具現化において、自分の生活スタイルや社会とのバランスを重視するユーザに焦点をあて、スタイリッシュなデザインをまとい、街中を軽快に駆け回るスポーティな乗用車となるようなデザインを実現することができた。ここでは、そのデザイン開発の概要について報告する(Fig. 1)。

*四輪開発センター

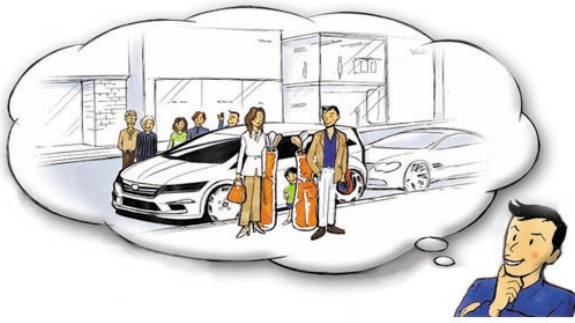


Fig. 1 Fun To Have STREAM

2. デザインのねらい

デザインコンセプトは、スポーティ乗用車をより特化させるため、“CROUCHING COUPE STREAM”とし、前傾に低く構え、今にも走り出しそうで、しかもクーペのようなパーソナル性に加えて、上質さをもつデザインを目標とした。

それを具現化するためには、外から見て低く、いかにスポーティでパーソナルに見せるか、それでいて、室内は心地よい広さと、隅々まで仕立てられた乗用車のような上質さをいかに持たせるか、というこれらの相反する内外デザインを高い次元で両立させることが課題となった(Fig. 2)。

3. パッケージレイアウト

外観はスポーツクーペのように低く、室内は初代 STREAM以上に広く、かつ上質さを醸し出すための検討を重ねた。新型 STREAM は、数値上限られた低全高・5 ナンバの枠の中で、いかに居心地良く移動できるかがパッケージレイアウトのカギとなる。その検討段階では、“数値議論”も重要ではあるが、まずはパッケージ検証モデルを最大限に利用し、チーム全員でアイデアを出し合った。そし



Fig. 2 CROUCHING COUPE STREAM

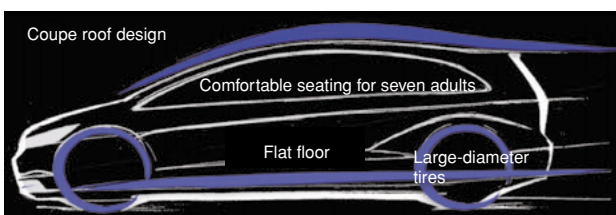


Fig. 3 Package layout

て、限られた空間の中で足元から着座までの心地よさの徹底追及を具体的テーマとし、開発をおこなった。

その達成手法としてフロアの設計を突き詰め、バスタブのように隅々までフラットな床面と3列目の大幅な低床化の設計とすることによって、どのシートに座っても腰からつま先までの窮屈感を払拭することができている。その結果、実際の室内寸法よりも広く、扱いやすい感覚となり、文字通りの“ゆとりの居住空間”が実現できたと考えている(Fig. 3)。

4. エクステリアデザイン

エクステリアデザインでは、第一印象でとても7人乗りには見えない、走り出しそうな前傾姿勢と、大径タイヤが強調される低い乗用車フォルム、“CROUCHING COUPE FORM”をテーマとした。特に、都市部のどこを走ってもカタチになるコンパクトで洗練された躍動感を表現した。

(1)クーペのように後ろに傾斜したルーフとサイドウィンドウグラフィック、しっかり存在感のあるフロントノーズと、大きくラウンドしながら傾斜するテールエンド、そしてコンパクトボデーながら大きく張り出したフェンダ造形、これらすべての要素がインテグレートしたデザインとすることによって、躍動感の強い新しい乗用車フォルムを構築している(Fig. 4)。

(2)躍動感をさらに特徴付けるため、イメージモチーフを“SILVER WOLF”と定めた。動物的な精悍さとシャープさを表現するため、フロントマスクは低く構えた‘狼’の顔を表現し、ボデーは彫りが深く、テンションの高い引き締まった面構成を、全幅 1695mm の枠の中で表現しきった(Fig. 5)。



Fig. 4 Side view

著作権上の理由により非表示

Fig. 5 SILVER WOLF

(3)また、リヤ周り形状は室内3列目の居住性を確保しながら、極力リヤガラスを傾斜させ、それよりさらにテールランプからリヤピラのグラフィックを段階的に強く傾斜させた。その結果、室内に座った時以上に、外観からの判断では3列目シートを感じさせない軽快なフォルムを実現した(Fig. 6)。

これら(1)-(3)の手法によって、「家族は大事だが、自分のスタイルも大事」とするユーザの要求に対し、一人でも、また二人で乗ってもカタチになるデザインを提案した。

5. インテリアデザイン

インテリアデザインは先進コクピットとしての“Emotional Sports Cockpit”と、各席の上質で快適な空間づくりとしての“Modern Comfort”を融合した「スポーツモダンインテリア」がその開発テーマである。

5.1. Emotional Sports Cockpit

ドライバ側は、シフトやエアコン操作部等の機能部品を凝縮することで、金属の塊感を表現し、アシスタント側は爽快なセクションと柔らかな触感で広さと質感を表現した(Fig. 7)。また“DUAL FACE”という考え方によって、昼



Fig. 6 Rear view



Fig. 7 Emotional sports cockpit



Fig. 8 DUALFACE METER

と夜で違った表情を持たせた。昼は金属の塊感や質感をもつ表情で、夜の表情には文字色を白とし、さらに、よく見るメータ、よく使うスイッチ、よく置くカップホルダには、ブルーの間接光を施した。昼夜それぞれのエモーショナルなインテリアを作り上げた。その代表例が DUAL FACE METER である(Fig. 8)。

5.2. Modern Comfort

モダンコンフォートでは、1列目、2列目、3列目のどの席に乗っても、快適で質感のあるインテリアを目指した。床のフラット化、シートの座り心地、日常的に使いやすい収納としてその形状や容量、配置を徹底的に検証した収納配置とするなど細部に気を遣ったインテリアとして仕立て上げた(Fig. 9)。

6. カラーデザイン

6.1.エクステリア

躍動感と“SILVER WOLF”のイメージを最適に表現するためのカラーデザインは、“Sharp & Dynamic”をテーマに開発した。この表現は、専用で新開発した“COOL UMBER M.”に特化されている。これは、精悍さと大人っぽさを感じるダークグレイをベースに、いわゆるギラギラ感を発するメタリックを融合させたカラーデザインである。光があた



Fig. 9 Modern comfort



Fig. 10 Color design

る部分は微妙に色合いがアンバーに変化し、デザインの凹凸面もはっきり、かつしっとりと演出できる色となっている。その他、既存色ラインナップも、STREAMにマッチした6色をチョイスしている(Fig. 10)。

6.2. インテリア

スマートな大人の感性を満たす自分を表現するためにインテリアデザインのコンセプト同様“SPORT MODERN”をテーマに開発した。シートファブリックにスポーツ性能とモダンテイストを入れ込んだ機能素材を使用し、上品なベージュとブラウンにより、洗練された色使いで室内をコーディネートしている(Fig. 11)。

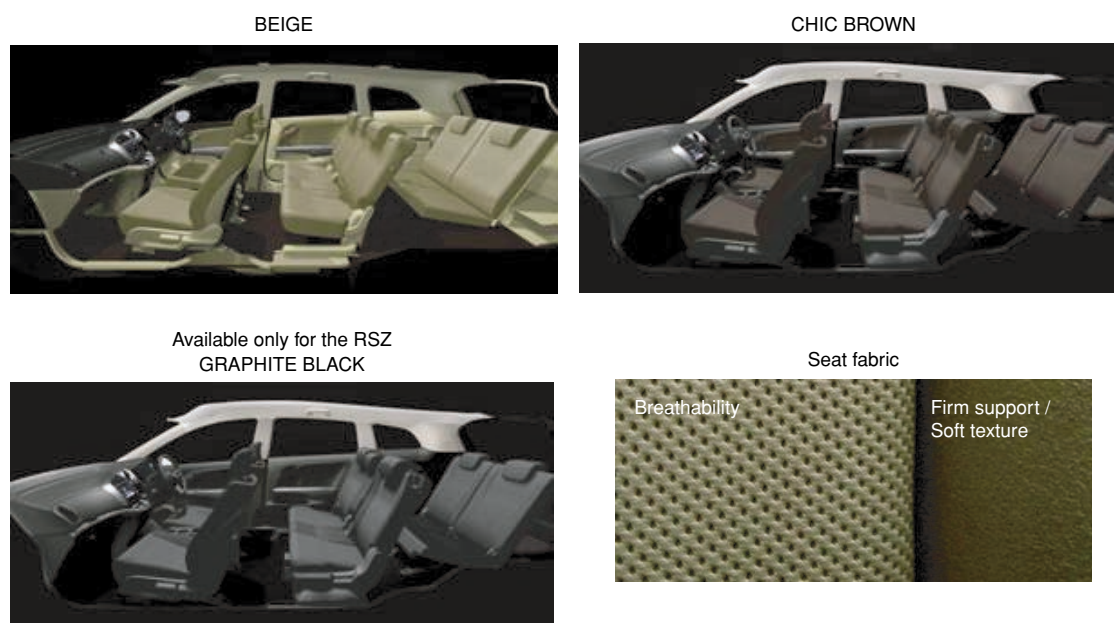


Fig. 11 Interior design



Fig. 12 RSZ design

7. RSZ デザイン

ノーマルより走りとスポーティさを求めるユーザーに対応したRSZ グレードは、サスペンションのチューニングに加え、デザインも“More Sporty”「もっと精悍に」をテーマとして開発した(Fig. 12)。

7.1. エクステリア

フロントマスクはブラックアウトされたグリルを中心に、ヘッドライトなどをダークトーンとし、低い位置にフォグランプを設定してより精悍な表情とした。また、サイドビューでは17インチの大径タイヤをさらに大きく見せるア

ルミホイールデザインに加えて、さらに低く、地面に張り付いて走る姿を演出するサイドシルガーニッシュによって、その精悍さを一層引き出している。

7.2. インテリア

RSZ のインテリアでは、内装全体をブラックトーンで引き締め、機能部品周辺をシルバーメタル調でシャープに際立たせることで、大人のスポーツを表現している。具体的にはドライバの手に触れるシフトノブやインナーハンドルをシルバーメタリックとし、シートステッチもシルバーとすることで SPORTS ムードを引き立てながら全体をコーディネートしている。

また、内外装ともに配された RSZ のエンブレムは、RS すなわち「CIVIC RS の若々しい SPORTY さ」と、Z すなわち「その究極の現代版」という意味を持たせ、モダンでシャープにデザインした書体でスポーツ心をアピールしている。

8. まとめ

デザインコンセプトを“CROUCHING COUPE STREAM”と、イメージモチーフを“SILVER WOLF”と定めた動物的な精悍さとシャープさをテーマに開発を進めた。その結果、高性能なスポーツクーペを思わせる躍動感あふれるデザインと上質で快適な空間づくりとしての居住空間を実現することができた。

New STREAM は乗る人のライフスタイルをスタイリッシュに演出し、所有する喜びが得られるドライバーズ・カーとして走りを楽しめると同時に、多人数でも居心地よく移動できるといえるような、“使う”ほどにカーライフをもっと魅力的にする乗用車の新しい理想型を創出できたと確信している。

その名のとおり New STREAM から、また新たな潮流を生み出す予感を感じている。

■ 著 者 ■



内野 英明



田中 幸一